前回までのあらすじ

流遠(るとお)やみひめは、小学六年生の普通の女の子。
学校があって、友達がいて、好きな男の子がいる。
しかし、そんな平穏な生活は、とある少女との出会いで一変してしまう。
少女の名はツバキ・タカチホ。
彼女は地球とは別の星・惑星ゼヘナから来たという。
ツバキの目的は〈カタストロ〉と呼称される敵性体の殲滅(せんめつ)であり、彼女はそのための存在――〈機獣(きじゅう)少女〉だった。

気分転換のため街へ出たやみひめ達は、謎の少女と警官隊が衝突しているというニュースを知る。謎の少女はクラウであると考え、ツバキは一人で現場へ向かうと告げるが、やみひめは共に行く事を決める。
クラウの目的地を予測し、迎え撃つやみひめ達。〈カグツチ〉は呼びかけに答えないままだが、MBジャケットを装着する事には成功する。
そして、クラウは現れた。
やみひめの隙(すき)を突いたクラウは一瞬で肉薄し、その爪を背後から突き立てた。それは距離的にも、前回の戦闘で見た速さから言っても、ありえない事だった。

登場人物

◆流遠（るとお）やみひめ

地元の小学校に通う、六年生のごく普通の少女。思慮分別が出来る聡明さと、他人を気遣える優しさを持つ。

◆ツバキ・タカチホ

惑星ゼヘナから来た〈機獣少女〉。小学五年生。地球では『高千穂（たかちほ）ツバキ』と名乗る。年齢不相応に発育の良い胸がコンプレックス。

◆カグツチ

ツバキのパートナー。〈機獣少女〉の武器であるＭＢデバイス。時代がかった女性の口調で話す。

◆橘（たちばな）アサト

高校三年生の少年。今年の夏、やみひめを痴漢から助けた事をきっかけに知り合う。やみひめの片想いの相手。

◆クラウ・Ｐ・ブラン

やみひめの親友にしてクラスメイトの少女。小学生離れした大人びた容姿の持ち主で、本人はそれをコンプレックスに感じている。

◆神譲（かみじょう）ハン

やみひめとクラウのクラス担任。大学の特別制度により、一年間の特別教育実習生として赴任中。クラウとは親戚。

機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX

そろそろ夜の帳(とばり)が下りようという時間帯。

県病院の裏にある付属の駐車場に、三人の人間の姿があった。

一人は長い黒髪をポニーテールにした少女だ。容姿・スタイル共に良いのだが、着ているのが和服で、なぜか狼のような耳と尻尾が生えており、まずそちらに目が行く者も多いだろう。

流遠(るとお)やみひめ。

今は高校生くらいの外見だが、実際にはまだ小学六年生である。

「……じゃあ、行ってくるね」

明らかに無理をしているのが判る笑顔でそう言うと、やみひめは残りの二人に背を向ける。彼女の視線の先に、待っていた相手が現れたからだ。まだ、かなり距離があるため顔は見えないが、こんな時間と場所で、ドレスのような衣装を纏(まと)った人間は他にいないだろう。

クラウ・P・ブラン。

〈機獣少女〉の殲滅対象である〈カタストロ〉によって、疑似的な〈機獣少女〉にされた少女。

やみひめは、これからクラウと戦わなくてはならない。

それを見送る事しか出来ない少女は無言で、ぐっと握った拳に力を込める。

ツバキ・タカチホ。

セミロングの黒髪を左側でサイドポニーにした、小学校高学年くらいの可愛らしい容姿である。

だが、その表情には子供らしい無邪気さなど微塵(みじん)もない。本来、自分がやらねばならない事を、やみひめに任せてしまっている。加えて、やみひめがこれから戦うのは、彼女の友人だ。そんな重荷を課しているにも関わらず――いや、だからこそ、ツバキはやみひめにかける言葉が見つからない。何を言っても、無責任な気休めにしかならない気がしてしまうから。

「――やみ子！」

しかし、そんなツバキの逡巡を余所(よそ)に、やみひめの背中に声をかける者がいた。今のやみひめと同年代――高校生くらいの少年だ。

橘(たちばな)アサト。

やみひめの想い人であり、彼女等の事情を知る協力者でもある。

「今から世界一無責任な言葉をお前に言うぞ」

普段通りの気怠(けだる)い表情だが、その声には心なしか、熱が感じられる。

「――がんばれ」

アサトが発したのは、とてもシンプルで、前言通り『世界一無責任な言葉』だ。

ツバキも同じ言葉を言おうとして、しかし飲み込んだ。

だってそれは、本当に無責任な言葉だから。

やみひめはもう、充分すぎるほどにがんばってくれている。そんな相手に、これ以上、何をがんばれというのか。そんなのは無責任で、重圧をかけるだけで、言った人間の自己満足でしかない。

だが、ツバキはアサトの言葉に、そういったものを感じなかった。ただ純粋に、やみひめの事を想って発した言葉だからだろう。

結局、言葉は使う人間によって印象が変わるという事だ。どんな立派な格言でも、使う人間が説得力を持たせられなければ、陳腐になってしまうように。

(良かったですね、やみひめさん。やはり橘さんは、貴女(あなた)の事を想ってくれていますよ)

第三者のツバキがそう感じたのだ。言われた本人が気付かないはずがない。

「ありがとう、アサト！　私――」

余程(よほど)嬉しかったのだろう。こちらを振り返ったやみひめの表情は喜色満面で、嬉しい気持ちが溢れだしてしまっている。

だが、かなり距離があるとはいえ、敵対している相手に背を向けてしまったのは失策だった。

「――っ!?」

声にならない音を発したのが、どちらだったのかは判らない。ツバキもアサトも、そんな事を気にしていられる状況ではなかった。

自分達が送りだした少女の胸を背中から突き破り、鋭利な刃が姿を見せるという、信じがたい光景が目の前にあった。

我に返ったのは二人ほぼ同時だったが、冷静さを残していたのはツバキだった。やみひめが刺された――その事実を受け止めるなり、アサトはやみひめの元に駆け出そうとした。だが、その行為は彼が、やみひめの二の舞になるだけだ。だからツバキは、アサトを背後から抱きしめるような格好で止めた。

「離せ、ツバキ！　やみ子が……やみ子ぉぉぉ――ッ!?」

「駄目です！　橘さん！　貴方(あなた)まで殺されてしまいます！」

しかし、小学生の少女の力で、高校生男子を押し留める事など出来るはずもない。ツバ

キは抱き付いたまま、ずるずると引きずられ、アサトは少しずつ前進していく。背後からクラウの爪のような手甲に貫かれた状態のやみひめに目を向ければ、彼女が大量の血を吐いている姿が見えてしまった。

（どうする！？　どうすれば……！？）

ツバキは混乱しそうになる思考を必死で落ち着かせ、状況を打開する方法を考える。だが、どうしようもない。今のツバキは無力な子供だ。ただの小学五年生の少女にすぎない。こんな状況に置かれ、どうにかしろという方が無理だろう。

（助けて！　誰でもいい！　奇跡でも、魔法でも、何だっていい！　私に出来る事なら、何でもするから……！）

藁（わら）にもすがる思いでツバキは願った。神頼みなどした事がないし、奇跡も魔法も存在しない事を、彼女はよく知っている。

そんなものには頼らない――そういう気持ちが彼女を〈機獣少女〉への道に進ませたのだから。

しかし、自分の力ではどうにもならない事がある。そういう状況に直面すれば、やはり人間は超常的なものにすがってしまう。ツバキもまた例外ではない。

だが、現実は無情だ。

都合よく奇跡が起こるなど、創作（フィクション）でしかありえない。

クラウの凶刃から解放されたやみひめが、しかし自力で立つ力も残っておらず、手にした機剣〈カグツチ〉を取り落とし、自らも地面に膝（ひざ）を突き、やがてうつ伏せに倒れた。

「やみひめさん！？」

ツバキはたまらず、悲鳴にも似た声を上げた。

倒れたやみひめの周囲は、すでに彼女の血で濡れており、出血は直（じき）に致死量に達するだろう。それを無表情に見下ろすクラウは、トドメを刺す必要もないと判断したのか、顔を上げ、ツバキに視線を移した。

判っているのだ、この場で次に脅威度が高い存在が誰であるかを。

「……くっ」

ツバキは必死に考える。だが、現状を乗り切る方法など浮かばない。もう、覚悟を決めるしかないのだろうか。

そう諦めかけた時だった――

世界が一瞬――反転した。

その瞬間、ツバキは途轍(とてつ)もない違和感に襲われた。言葉では表現不可能な感覚。少なくとも、その違和感を表現する言葉をツバキは知らない。

「……何なんだ、この感覚――」

ツバキに後ろから抱き付かれた格好になっていたアサトも、同様の感覚に襲われていた。正体不明の感覚に、冷静にならざるをえなかったのだろう。先ほどまでより、いくらか落ち着きを取り戻しているように見える。

そして、それはクラウも例外ではなかった。無表情は変わらずだが、警戒するように周囲に注意を向けていた。

その場にいる誰もが、異様な感覚に戸惑っていた。

そして更に異変は起こった。

「――――!?」

いち早く異変に気付いたのはクラウだった。すぐ足下に倒れ伏していたやみひめの身体(からだ)が黒い光に包まれ、危険と判断したのか、クラウは咄嗟(とっさ)にその場から退避した。結果的に、黒い光を中心に、ツバキ達とクラウが一直線に並ぶ位置関係となった。

やがて、ドーム状だった黒い光が消えると、其処(そこ)にやみひめの姿はなく、代わりに不可思議な何かがあった。形状で言えば、キリストが磔(はりつけ)にされた事で知られる、十字架に似ている。人を磔刑(たっけい)にするには充分なサイズだが、そのためには上下が逆さまだ。材質は判らないが、黒いそれは光沢があり、鈍い輝きを放っている。

印象としては逆十字の黒い結晶体(クリスタル)だろう。

だが、それを見たツバキは見た目とは違う印象を抱いていた。

「これは、繭(コクーン)……?」

口を突いて出た言葉に、ツバキ自身が疑問を感じていた。

『繭(コクーン)』

それは、幼虫が成虫へと変態を遂げるための『ゆりかご』だ。外界から隔絶された、変化を行うための密閉空間。

なぜ、そう思ったのかは判らない。目の前のそれは、『繭(コクーン)』と呼ばれるもののイメージと合致しない。

しかし、ツバキはそう感じた。

そして、その印象が正しいとしたら。

「中で何かが起こっている……?」

●●●

気付くと、やみひめは其処にいた。

畳が敷かれた床。障子で仕切られた壁。行灯で照らされた室内。これでもかと『和』の調度品で統一された其処は、紛う事なき和室だった。

「此処って、〈想刻の間〉……？」

やみひめは一度、来た事がある。

本来の状態で戦えないツバキの代わりに、〈機獣少女〉として戦う事を決めた時、MBデバイスである〈カグツチ〉と契約を行った際に来た場所――仮想空間。

だとすれば――

「……やっぱり」

やみひめが意識を向けると、最初からその場にいたように、一人の少女が立っていた。

「良かった。また会えたね――カグツチ」

やみひめの前に現れた少女――それは、〈想刻の間〉における〈カグツチ〉の姿だった。

第十五話

『再会する機獣少女』

「良かった。また会えたね――カグツチ」

私はとても懐かしい友達と再開したような気持ちで、カグツチに呼びかけた。最後に話したのは昨日だけど、此処――〈想刻の間〉で会うのは、ツバキ達と出会った日以来だから、不思議と懐かしい感じがする。それでも一週間と経っていないんだけど、ここ数日の目まぐるしさを思うと、とても昔のように感じてしまう。

「……」

だけど、カグツチは答えてくれない。叱られて俯く子供みたいに下を向いているから、髪の毛で隠れて表情も見えない。

私はカグツチのすぐ側まで行き、俯いてしまっている顔を見上げる。今の私は本来の小学六年生の姿に戻っているから、見上げないと目を合わせられない。

黒い和服の上からでも判る抜群のスタイル。ポニーテールに結った長い黒髪。吊り目がちな橙色の瞳。見た目は高校生くらいで、狼みたいな耳と尻尾が生えている。

見れば見るほど、さっきまでの現実空間の私と似ている。

これって偶然？　それとも、契約相手によって姿が変わって、契約相手に似た姿になるとか、そういう事なのかな？

「ねえ、どうしたの……？」

私が疑問を抱いている間も、カグツチは口を開かない。私が目を合わせようとすると、気まずそうに視線を逸らしてしまう。それは合わせる顔がないようにも感じられるし、拗ねているようにも感じられる。

一向に話が進まない。

あ、ちょっと苛々してきたかも……。

「――カグツチ！」

「！？」

私が少し声を荒げると、カグツチがビクッと身を震わせた。

「私の目を見て。話す時は相手の目を見て話しなさいって、学校で習わなかったの？」

「……学校など、通った事がない」

ようやく返事をしてくれた。不貞腐れたような口調だけど、話が出来ると判っただけで充分だ。

「やっと答えてくれたね」

「……」

また黙ってしまった。視線は私に向いたままだけど、以前に此処で会った時や、普段のMBデバイスの時のような、堂々とした雰囲気はまるで感じられない。やっぱり、叱られ

ている子供みたいだ。
本当に何があったんだろう。私が大きくなったまま目覚めてから、話しかけても答えてくれなかったのは、答えられないんじゃなくて、答えたくなかったからなのかな。
そんな事を考えていて、ふと気付いた。
現実空間の方はどうなったのか。
そうだ。私はクラウに刺されて、血を吐いて、倒れてしまって、それから――
「……外の事は問題ない。ツバキが上手くやってくれる」
私の思考を読んだみたいに、カグツチが言った。
「問題ないって。でも、ツバキは……」
「問題ないと言った。それよりも今、其方(そなた)が憂慮すべきは自分自身の事だ」
カグツチの言葉には、有無を言わせぬ説得力があった。ほんの少しだけど、いつもの調子に戻ったような気がする。
「……現実空間の私は、どうなっちゃったの？」
だから私はカグツチの言葉を信じて、自分の心配をする事にした。ＭＢジャケットの機能は知っている。だけど、それで助かるような状態だとは思えない。
「……あのまま放置すれば、数分で死に至る。だが、そんな事はさせない」
「どういう事？」
「現実空間での其方の時間を止めている。今は精神の複製(バックアップ)と、新たな肉体の再構築、その後に行う精神の再インストールの準備中だ」
「……」
カグツチが何を言っているのか判らない。パソコン用語みたいな事を言っていたけど、私はコンピュータに疎(うと)いから、例え話だとしても同様だ。
「えっと……つまり、どういう事？」
「其方が死なぬよう、新たな身体(からだ)を造り、そちらに魂を移すという意味だ」
うん。意味は判った。でも理解が追いつかない。
だってそれはＳＦで、現代の科学や医学じゃ無理だから。
「この星の技術では不可能だろう。だが、私にはそれが出来る」
もう訳が判らない。だから、理屈とかは無視して、知りたい事だけを訊(き)く事にした。
「……とりあえず、私は死ななくて済むって事？」
「そういう事だ。安心するがよい、元の姿にも戻れる」
私の心情を察してくれたのか、カグツチは苦笑気味に答えてくれた。
そっか。現実空間での事はツバキがなんとかしてくれて、私も生きて元の姿に戻れるん

だ。なら、万々歳――なのかな。

「……ただし、あの娘は助けられん」

カグツチの言葉に、私は耳を疑った。『あの娘』というのが、くらうの事だと判ってしまったから。

「……あの娘って、くらうの事だよね。どういう意味？」

「言葉通りだ。あの娘を〈カタストロ〉から解放する術（すべ）が、ツバキにはない。故（ゆえ）に、諸共（もろとも）に殲滅するしかない」

「嘘……」

「事実だ」

「嘘！　嘘だよね！？　そんなの……ねえ！？」

「――――」

カグツチは答えない。口を真一文字に引き結んで、伏し目がちに私を見返すだけ。

「そんな……」

それじゃあ、ツバキと一緒に来た意味がない。ツバキを手伝って、くらうも助ける。そのために来たのに……。

「……あの娘を救う方法が一つだけある」

私が打ちひしがれていると、カグツチが躊躇（ためら）いがちに言った。

「！　どんな方法！？」

カグツチの言葉に、私は飛びかかる勢いで食いついた。というか、ほぼ飛びかかっていた。

「落ち着くがよい。まったく、胸元が乱れてしまったではないか……」

興奮気味の私を引き剥（は）がすと、カグツチは私が飛びかかったせいで乱れてしまった和服の合わせを整える。和服は身体（からだ）の線が隠れてしまうものだけど、カグツチの場合は全然隠せていない。きっと、胸のサイズはツバキより大きいはず。

「それで、どうすればくらうを助けられるの？」

カグツチが乱れた和服を整え終わるのを待って、私は訊（たず）ねた。

「簡単だ。其方（そなた）が、あの娘と戦えばよい」

「私なら、くらうを〈カタストロ〉から解放出来（でき）るって事？」

「そうだ」

「……」

どういう事だろう。ツバキはそんな事は言っていなかったから、ツバキが知らない方法をカグツチは知っているって事……？

「だが、現実空間の其方（そなた）の準備が終わるまで、まだ時間がかかる。終わった頃には、決着がついているだろう」

「でも、救う方法があるって……！？」

私は、またカグツチの胸元に飛びかかる。

「だから、落ち着けと言うに……其方には学習能力がないのか」

再度、私を引き剥（は）がして、カグツチは乱れた胸元を正す。カグツチが呆（あき）れる気持ちも判るけど、私の気持ちも察してほしいと思う。

「其方が戦えば、あの娘を救える。そして、すぐに其方の準備を終わらせる方法もある。問題なのは、その方法なのだ」

私は目で『どんな方法なの？』と訴えかける。そうしないと、逸（はや）る気持ちを抑えられそうになかったから。

「……」

カグツチは神妙な顔をして、また黙ってしまう。私と目は合わせたままだけど、その表情は気まずそうで、どこか怯（おび）えた子犬を連想させる。

「言いにくい事なの？　すごく恥ずかしいとか、言ったら私が引いちゃうとか。それとも、私がカグツチを嫌いになったりするかもしれないような事？」

「……」

カグツチが耐えきれなくなったみたいに、無言で私から目を逸（そ）らした。きっと、話す踏ん切りがつかないんだと思う。私も何も言わず、カグツチの言葉を待った。こういう時は急（せ）かすより、待つしかない。

どのくらい待っただろう。外界と遮断された空間で、時計もないから、時間の感覚がつかめない。此処（ここ）は現実空間とは時間の流れが違うから、焦る必要はないけど、それでも、のんびりしていられる気分じゃない。

だって、ツバキとくらうが戦っているはずだから。

「……昨夜の戦いで、其方が意識を失った後の事は、ツバキから聞いているな？」

ふいにカグツチが重い口を開いた。

「うん。私でもカグツチでもない人格が現れて、くらうを圧倒して、ツバキの事も殺そうとしたって……」

今でも信じられない。自分の中に、自分じゃない誰かがいるかもしれなくて、それがツバキを殺そうとしたなんて……信じたくない。

「ツバキの言った事は事実だ。だが、一つだけ間違っている点がある」
「え……？」
なんだろう。カグツチの雰囲気が変わっている。いつもの調子に戻ったようにも見えるけど、違う。自分を押し殺すように、感情を排除したみたいに、ただ事実だけを語る機械になろうとしている。きっと、そうしないと話せない内容なんだ。
「ツバキは『其方（そなた）でも私でもない人格が現れた』と言ったが、それが間違いだ」
どういう事か判らず、私は無言でカグツチの次の言葉を待った。

「その人格は私なのだ。正確には――本来の私だがな」

『本来の私』という言葉で、私は理解した。カグツチは過去の――機獣（きじゅう）だった頃の記憶を失っていて、本当の名前も、どんな機獣だったのかも覚えていない。『カグツチ』というのは断片的な記憶の中にあった言葉で、印象的だったために、現在の名前として名乗っているにすぎない。
『本来の私』というのは、つまり機獣だった頃のカグツチの事だ。ツバキが別の人格だと感じたという事は、当時は今とまったく違う性格だった事になる。
私の知っているカグツチは、好戦的だけど乱暴じゃない。戦えない相手を一方的に痛めつけたりなんてしない。それこそ、自分を制止したツバキを殺そうとなんて、絶対にしない。
だってカグツチは、私やツバキを見守るみたいに気遣ってくれていた。ツバキだって、カグツチを信頼していた。私は出会って日が浅いけど、それでも、カグツチの事は信頼している。
だけど――
「……」
「怖くなったか？　本来の私が、あのような性格だったと知って」
「……よく、判らない。だって、今のカグツチは、私の知ってるカグツチだから」
なにより、私はツバキから聞いただけで、『本来の人格に戻ったカグツチ』を見ていないから、いまいち実感が湧（わ）かない。
「順を追って話そう。まず、私が状況を理解したのは、昨夜の戦いが終わった後だ」
くらうが撤退して、私達――という言い方でいいのか判らないけど――が気を失って、アサトの家に運ばれた。その時点で、カグツチの意識はＭＢデバイスじゃなくて、私の中にいたらしい。そして、私が眠っている間にカグツチは『今』の人格に戻って、失ってい

た記憶を取り戻した。本来の自分と、それを思い出す引き金になった昨夜の戦いの事も。

「それじゃあ、くらうを圧倒したのも、ツバキを殺そうとしたのも、今のカグツチの意思じゃなかったって事？」

「言い訳にするつもりはないが……そういう事だ。そして、其方（そなた）には感謝している。其方が止めてくれなければ、私はツバキを手にかけていたかもしれん」

ツバキの話だと、カグツチがツバキを殺そうとした時、くらうが拘束から抜け出して攻撃してきた。それはツバキを狙ったもので、ツバキを守って傷を負った時には、昔のカグツチじゃなくて、私の人格に戻っていたらしい。

その時の事も、私は何も覚えていない。

「いいよ。私もその時の事は覚えてないし、カグツチが悪い訳でもないんだから」

「しかし……」

「皆、こうして無事に生きてる。それで充分だよ」

「……さようか」

「うん。さようだよ」

ちょっと変な日本語になってしまった。でも、少しは気が楽になったのか、カグツチは困ったような笑みを浮かべた。

「ねえ、訊（き）いてもいい？　昔と今で、だいぶ性格が違うみたいだけど……」

よくある『昔は荒れてた』っていう事なのか。それとも、昔の記憶を失う事で、性格も変わってしまったのか。

「……」

私の問いに、カグツチが少しだけ悲しそうな顔をした。つらい事を思い出した時、人はそういう顔をする。

「あ、ごめんね。話したくないなら……」

「いや、むしろ其方には知ってもらわねばならん。私がまだ機獣（きじゅう）だった頃の事。そして、私達自身の事も」

そう言うと、カグツチは私と目線の高さが同じになるように腰を落とすと、熱を測る時みたいに、こつんと私とおでこを合わせた。

●　●　●

急に視界が切り替わった。

青い空と白い雲。太陽の光が明るく照らす、広大な荒野。それは地球によく似た景色だ

けど、別の星だと判る。

薄っすらと浮かぶ、二つの真昼の月。

そして、荒野で戦っている巨大な戦闘機械獣の姿。

これはカグツチの記憶だ。

まだカグツチが機獣だった頃。人が機獣と共に戦場を駆けていた時代の惑星ゼヘナの光景だ。

戦っているのは黒い狼型と、角（つの）と襟飾（えり）りが付いた赤い恐竜型――トリケラトプスに似ているけど、私は恐竜には詳しくないので判らない――で、黒い方はすごくシンプルな装備なのに対して、赤い方はすごく重武装で、『動く要塞』みたいなイメージが浮かぶ。

戦い方で判る――黒い狼型が〈カグツチ〉だ。

赤い恐竜型が次々に背中に積んだ武器を撃つけど、〈カグツチ〉はそれを難なくかわし、相手の側面に回り込む。背中に積んでいた白い剣が、支持腕（アーム）を介して展開すると、〈カグツチ〉はすれ違い様に相手の背中ごと装備一式を叩き斬った。

――すごい。

機獣の事も、現実の兵器同士の戦いの事も知らないけど、〈カグツチ〉がすごく強い事は判る。あっけなく勝負がついたから、単純に赤いのが弱いようにも見えるけど――違う。

〈カグツチ〉が圧倒的に強いんだ。

それは次に見せられた光景で確信になった。相手が大きくても、すごい装備を持っていても、数が多くても、〈カグツチ〉は絶対に負けなかった。

たった一機で戦う姿は、『孤高』に見えても『孤独』には見えなかった。それはきっと、一人で戦っている訳じゃないから。

やがて、見せられる光景は戦闘だけじゃなくて、二人の男女のものが多くなった。どちらも二十歳前後で、女性の方はカグツチだった。黒い和服に身を包み、長い黒髪をポニーテールにした、私の知る〈想刻の間（そうこくのま）〉での姿だ。

男性の方は、私のよく知っている人に似ていた。男性にしては長めの黒髪で、何かに疲れているのか、とても物憂（ものう）げな表情をしている。カグツチと〈機獣少女〉の仮契約を交わした時にも見た、アサトによく似た大人の男性。アサトを知っている人なら、あと数年もしたら、こんな風に成長すると思うだろう。

この人がカグツチの搭乗者だ。

そして、カグツチにとっては、それ以上の意味を持つ人。

なんとなく判る。多分、理屈じゃなくて、感覚で理解出来るように記憶を見せているんだと思う。一緒に見ているであろうカグツチの感情も伝わってくるから。

機獣だった頃のカグツチは、今の私達のように〈想刻の間〉で彼と逢っていた。

戦場を共に駆ける相棒としてだけでなく、仮想空間では想い人として。

記憶の中の二人は、言葉にしてしまうと安っぽくなってしまうけど、とても幸せそうだ。

戦場にいる時も、肩を並べている時も、同じくらい満ち足りていたんだと思う。

そんな気持ちが伝わってくる。

だけど、幸せな時間は永遠には続かない。

どんな事にも終わりがあって、限りがあるから。

●
●
●

「――私は彼を護れなかった。死ぬ時は共に戦場でと決めていたのに、私だけが生き残ってしまった」

記憶の追体験――ううん、共有が終わると、カグツチは呟くように言った。それは独り言みたいで、悲しいとか、悔しいとか、そういった感情は込められていない。きっと、そんな時期は過ぎてしまっているんだと思う。もう何千回、何万回と繰り返してきたから。

「彼を喪った私は、どうしようもない感情の行き場を周囲に求めた。荒れ狂い、手のつけられない状態となった私は、機体を破壊され、コアを休眠状態にされて封印処置となった。私は特殊な機獣で、コアの完全破壊が不可能だったからな」

記憶を共有したから、その事も私は知っている。それでも、その光景を見せる事をしなかったのは、見られたくないというより、見せたくなかったんだと思う。カグツチにとっては今更だけど、初めて見る私はショックを受けるはずだから。

実際、共有した記憶を再生しようとしても、最後まで見られない。

荒野に立ち、狼型の機獣の姿をした〈カグツチ〉が、狂ったような遠吠えを上げている。黒い装甲に走る紅いラインは、まるで血液の循環のようにも見えるし、全身に怒りと憎しみを巡らせているようにも見える。やがて、周囲を完全に包囲した上での集中砲火の雨が〈カグツチ〉に降り注ぐ。地形が変わるんじゃないかというくらいの弾丸を撃ち込まれても、〈カグツチ〉は倒れない。集中砲火がやむと、獲物に群がる肉食獣のように、次々と新たな機獣が〈カグツチ〉を襲う。武器を破壊され、装甲を引き剥がされ、機体を食い千切られても、怒り狂った狼は止まらない。

それはまるで『弁慶の立ち往生』。
もう、護るものなんてないのに……。
やっぱり最後まで見られなくなって、私は記憶の再生をやめてしまう。
「カグツチがコアの状態で眠っていたのは、〈ジェネレーター〉が造られる前からで、眠りに就いたのも、自分の意思じゃなかったんだね」
惑星ゼヘナから戦争がなくなって、機獣も必要とされなくなった。それから、新たなエネルギー発電施設である〈ジェネレーター〉が造られて、機獣のコアが動力となった。それを拒む権利が機獣には与えられ、そういった者達はコアの状態で休眠する事を選んだ。いつかまた、自分達が必要とされる日を待って。
「そうだ。私の記憶が失われていたのも、再起動の際の事故ではなく、自ら過去を封印していたのだろう……忘れてしまいたいという願いからな」
そう言うと、カグツチは少し自嘲的に笑った。
カグツチの話は悲しいけど、私は少し安心もしていた。昨夜の人格は、封印される直前までのもので、今のカグツチが本来の姿なんだと判ったから。
そして、もう一つ判った事がある。記憶の共有を行う直前にカグツチが言った、『私達自身の事』という意味。
「ねえ、カグツチ」
「なんだ」
「今日は一度も名前で呼んでくれないね」
「……」
いつもは『やみひめ』とも呼んでくれるのに、此処で再会してからは『其方』としか呼ばれていない。
「記憶が戻って、本当の名前も思い出したから?」
「……そうだ」
「そっか。私もカグツチの事を、今更別の名前で呼ぶのも変な感じだけど、それ以上にお互い……気恥かしいよね」
もう、すべて知ってしまった。カグツチの過去も、本当の名前も、自分にとってどういう存在なのかも。
「でも、呼ばせて。私にしか出来ない事だし、これは私が言わなきゃいけない事だと思うから」
私は、私と目線を合わせるために膝立ちになったままのカグツチの後頭部に腕を回して、自分の胸元に抱き寄せる。今は小学生の姿に戻っているから、ツバキみたいに大きくも柔

らかくもないのは許してほしい。

「これが本当の名前なんだよね――ヤミヒメ」

私の言葉に、カグツチ――ううん、ヤミヒメがわずかに身を震わせた。顔は見えないけど、今はその方がいい。だって、気恥かしいのは私も同じだから。

「あなたは私――別の世界の、別の私なんだよね」

「……そうだ。私は其方（そなた）だ。戦闘機械獣としてアサトに出逢（であ）い、惹（ひ）かれた、別の可能性の其方だ」

以前、私の世界とツバキの世界は、並行世界なんじゃないかという話になった。その時は半分雑談みたいな雰囲気だったから、誰も本気にはしていなかったけど、間違いない。

ヤミヒメは並行世界の私なんだ。

あのアサトによく似た男の人も、並行世界のアサトなんだ。別の世界でもアサトと一緒にいられたのは嬉しいけど、この世界でも、そういう結末が待っているのかな……。

「案ずるな。この世界での其方は、アサトと同じ人間なのだ。私達のような事にはならん」

以心伝心――でいいのかな。同一人物だからか、記憶の共有をしたからなのか、それとも〈想刻（そうこく）の間（ま）〉に、そういう働きがあるのかは判らないけど、お互いの考えている事がなんとなく判ってしまう。

「でも、いいのかな」

「自分に気など遣うな。自分の幸せを喜ばぬはずがなかろう――私も其方なのだから」

「なんか、だんだん訳が判らなくなってきちゃった」

「ふむ。実は私もだ」

間の抜けた会話がおかしくなって、私達は笑った。もっと話したい。並行世界のアサトはどんな感じで、ヤミヒメはアサトと、どんな風に過ごしたのか。もう知っているけど、本人の言葉で聞きたいから。

でも、あんまりのんびりもしていられない。

現実空間に戻らないといけない。

でも、そのためには――

「本当に、それしかないんだよね」

「そうだ」

「でも……」

「よいのだ。むしろ、私がそうしてほしい」

現実空間では、私の蘇生が行われているけど、それには時間がかかる。それが終わる頃には、ツバキがくらうを〈カタストロ〉ごと殲滅してしまっている。だけど、私が戦えばそれを回避出来る。蘇生作業をすぐに終わらせられる方法、それは――

――ヤミヒメとの融合。

この世界の私にはない、ヤミヒメが持っている力。それを、一つになる事で自分のものにする。そうすれば、蘇生作業は一瞬で完了する。

「――私の存在を其方に捧げる。受け取ってくれ」

「だけど、それじゃあヤミヒメが消えちゃうんだよ？　もう、こうして話せなくなる。ツバキとも会えなくなるんだよ……？」

「承知している。残念ではあるが、もう静かに眠りたいというのも本心だ。それが出来るのは、この方法しかない」

「でも……！」

「それに、何もかも消えてしまうという訳ではない。私の人格は消えるが、私の記憶や力は其方に残る。其方が生きていれば、私も其方の中で生き続ける。……ふむ、大衆が好みそうな美談ではないか」

私は言葉に詰まってしまう。納得した訳じゃない。でも、ヤミヒメがそう望んでいる事が判ってしまうから、反論なんて出来ない。アサトが死んで、おかしくなって、だけど後を追う事も出来なくて。そんな記憶を思い出させてしまった原因は私にもあって。

なにより、並行世界を越えて私達が出会ったのは、このためなんだって判るから。

「うっ、うぅ……」

「……まったく。其方が私を慰めてくれるのではなかったのか？」

涙を堪えきれなくなった私に苦笑すると、やれやれといった様子でヤミヒメが立ち上がる。そして、そのふくよかな胸に私を抱いた。完全に構図が逆転してしまった。

「泣くなとは言わん。私のために泣いてくれておるのだからな」

「ごめんね……で、でも……やっぱり、そんなの……悲しいよ……！」

ヤミヒメはそれ以上言わず、ただ、私をぎゅっと抱きしめた。不思議な感覚だけど、すごく落ち着く。私の十二年の人生なんかとは、比べものにならない時を生きてきた差なのかな。そのうち、アサトと過ごした時間はほんの少しで。だけど、とても大切な時間だった。それを取り戻す事は、もう叶わない。

それなら――

「ヤミヒメ！　私、幸せになるよ！　アサトと一緒に、たくさん幸せになるから！　そうすれば、ヤミヒメも一緒に幸せになれるよね……！?」

見上げると、ヤミヒメが呆気にとられた顔をしていた。私、何かおかしな事言ったかな……?

「ああ……ああ、そうだな。其方は幸せになってくれ。それが私にとっても――幸せとなる」

でも、すぐに優しい顔をして、そう言ってくれた。目尻に薄っすらと光るものが見えたけど、何も言わない。お互い様だから。

「だが、私とて幸せだったのだからな。そこは勘違いするな」

「うん。知ってる」

「ならばよい」

「……うん」

言葉が続かなくなって、私達は黙り込む。次の言葉は、最後の言葉になってしまうと判っているから。

どれくらい無言でいただろう。長い気もするけど、一瞬だった気もする。やっぱり此処は時間の感覚が狂う。

「――では、そろそろだな」

「うん……そうだね」

ヤミヒメに抱きしめられた格好のまま、私達は最後の言葉を交わす。

「……ではな」

「違うよ」

「ん?」

「これからは、ずっと一緒なんだから。だから、別れの言葉は違うよ」

「……そうだな。私はずっと、帰る場所を探していた。だから、この言葉が相応しいかもしれぬ」

ヤミヒメはそこで言葉を区切ると、その一言を大事そうに呟いた。

「――ただいま、私」

次の瞬間には、ヤミヒメの姿は消えていた。だけど、ヤミヒメの最後の言葉も、消える

間際に見せてくれた笑顔も、私ははっきりと覚えている。

手を開くと、そこには黒い勾玉（まがたま）が握られていた。それがヤミヒメの存在した証だ。ヤミヒメの想いは私の中に融（と）けたけど、彼女が生きていた証は、ここにある。

「――おかえり、私」

私は残されたヤミヒメの欠片（かけら）をぎゅっと胸に抱き、もう一人の私を受け入れた。

出会うはずのない、別の私との出会い――それは自分自身との再会なんだと思う。

機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL REUNION

それは再会（リュニオン）の物語――

つづく

あとがき

どうも、流遠亜沙（るとおあさ）です。

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX』第十五話をお届け致します。

英題の『XXXXXXX』、これは『セブンエックス』とかではなく、伏字だったのですが、ようやく明かす事が出来ました。はい、『REUNION』です。リュニオン、『再会』という意味です。前のページで書いていますが、ここまで一年以上かかったので、もうちょっと言わせてください。リューニーオーン！（アーマーゾーン！っぽく）

まあ、〈カグツチ〉が並行世界のやみひめである事は、このサイトで読んでいる方のほとんどが判っているとは思うのですが、だからこそ、ここまでお付き合いくださった方々には感謝の念に堪（た）えません。

本当にありがとうございます。

とはいえ、まだ終わりではないので、もうしばらくお付き合いいただく事にはなるのですが。

それでは謝辞を。

重複となりますが、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。本当に、本当にありがとうございます。

次回はサイドストーリーです。〈難攻不落〉と〈虐殺爪竜〉の血湧き肉踊るデスマッチにご期待ください。

２０１６／１／28　流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX』小説ページに戻る